

ダビデ王物語講解説教サムエル記上2 1章1-16節
『さすらい』

サウルは自分の王位という立場が神によって否定され、なお王で居続けることで、正気を失い始めていきました。しかも彼のそばにはダビデがいました。サウルはダビデを気に入っていました。サウルの家族も皆そうでした。だがサウルにとってダビデの存在は自分というものの根本から脅かす存在でもあって、娘の婿にまでしたこの青年ダビデを殺そうとしていました。サウルは狂気に足を踏み入れている、ということではなく、ずぶずぶと狂気の中に身を沈めつつありました。

サウルのダビデ殺しへの思いが危険水域を超えたとき、サウルの娘であり、ダビデの妻であるミカルは今夜のうちに逃げないと命が危ない、と言ってダビデを窓から釣り降ろして脱出させます。ダビデは逃亡の生活が始まるのです。彼は預言者サムエルのところに逃げ込みます。しかし追手は一国の王です。たくさんの兵士や部下を動員して、ダビデを捜すのです。必死に捜す。当然見つける。ダビデはすんでのところまで逃げ延び、さらに逃亡生活を続けることになっていきます。サウルの息子ヨナタンも父とダビデの間で取り持とうとするのですが、逆にサウルは激昂してヨナタンにまで槍を投げつけたのでした。もう誰もサウルを止められない。ダビデも必死に逃げます。

ダビデは豊かではなくても、羊飼いとて家族に囲まれての日々を送っていました。それがある日を境に、何の因果か王家に出入りするようになり、ゴリアトを倒したことでイスラエルの英雄となり、若き兵士としてサウルに用いられ、王の娘の婿にまでなったのです。それははたから見れば、典型的なサクセスストーリーと言えます。しかしダビデ自身にとってはどうだったのか。迷惑といえば迷惑な話だったかもしれない。なぜなら、ダビデは誰よりも王のために働き、誰よりも王のために武勲を挙げたにもかかわらず、その王からいのちを狙われることになったのですから。こんな理不尽な話はない。ダビデの人生はサウルによってめちゃくちゃです。武器も食料も何もないうまま、身一つで逃亡生活を強いられているのです。絶えずいのちを狙われる身になっているのです。サムエルのところに駆け込んだダビデ。サムエルはダビデとナヨトにとどまった、つまり住んだとありますから、まさに身を寄せ、サムエルの庇護の中で暮らしたのです。しかし、王は総力を挙げて追

うのです。ダビデの所在は明らかになり、ダビデはサムエルとも別れて逃げるほかなかった。そして次にダビデが逃げ込むのはノブの祭司アヒメレクのところでした。

ダビデは人としての危機に瀕したとき駆け込む場所があった。人生に行き場がなくなるようなとき、どうしようもなくなった時、どこへいくのか。そもそもいくところがあるのか。家族も、彼を愛する人たちもどうすることもできない、一人で逃げるしかない、それがダビデでした。その時ダビデは預言者のところへ、祭司のところに駆け込んだのです。ダビデは祭司のところで、パンを求めました。食べるものに飢えていたのです。もちろん、祭司のところで必ず食料にありつけるわけではないでしょう。ダビデの申し出は無理やりと言えは無理やりです。武具まで求めています。これもまた無茶と言えは無茶です。しかしダビデは祭司のところで、パンを受け取りたかったのです。祭司のところで武具を手に入れたかった。それは、神のもとに駆け込んで、神から受けたかった、ということでしょう。苦しい時の神頼み、ということわざがあります。これは辞書によれば、困った時だけ神さまに頼ろうとする身勝手さを表すことわざと出てきます。けれどダビデは、困った時だけ、身勝手に駆け込んだのではなかった。これまでもそうであったように、今ここでも神さまに頼るのです。神さまから大事なものを受け取ろうとするのです。

本当に困った時、いくところがある人は幸いです。自分かけられた重圧や重荷を抱え込みながら、とにかく駆け込んでいくところがある人は幸いです。友人も地人も、家族も何もできないという困難を抱えてでも、駆け込んでいくところがある人は幸いです。ダビデは神のもとに駆け込んだのです。

神のもとに駆け込んでいく、というのは神を信頼しているからです。その信頼というのは、どういう信頼かというと、神のもとでいのちを受けてきた、という信頼です。神のもとへいけば、自分が抱え込んでいる問題を自分が思う形で解決してくれるという信頼ではなく、そもそも神のもとでいのちを受けてきた、という信頼です。神のもとへ駆け込むことは、すぐさま傷の手当てをしてくれる病院のようなものではない。それを期待している人は少なくない。でもそうではない。神のもとでいのちを受ける。わたしたちの場合、十字架と復活から愛といのちを受けるのです。いやすでに受けてきたのです。だから安心があり信頼がある。だから何度でもそこに戻るので。ダビデがパンと武具を受け取ったことはまことに象徴的です。

さて、アヒメレクのもとにもサウルによる偵察隊の兵士は来ていました。イスラエルの全土がサウルによって偵察されていたのです。ダビデの逃げ場は限りなく狭められていくのです。アヒメレクのところも、逃げ出さなければならなかったダビデは思い余ってペリシテ人の都の一つガトの王アキシユのもとに辿り着くのです。

自国の為政者、王にいのちを狙われたものが他国に亡命するということは現代においてはもちろん、古代においてもありました。けれどダビデはここで熟慮を重ねてガドに亡命した、というよりもさまよい歩いて辿り着いた、と言った方が正確かもしれません。イスラエルの国中、行き場はないのですから。実際ダビデの逃避行の旅は長い長いものでした。ガドに着くと、アキシユの家来たちの中で目ざとい連中がダビデを見て、「こいつはダビデではないか」と騒ぎ出したのです。ダビデにすれば、他国でひっそりと身を隠そうと思っていたかもしれない。写真などなかったこの時代に、ダビデはそれほどまでに有名人だった、ということです。それだけでない。イスラエルで凱旋の時に女たちが歌ったあの歌、「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」というあの歌がペリシテにも知れ渡っていて、こいつはあの歌のダビデではないか、と叫び始めたのです。ガドの町に一瞬にして緊張が走ったに違いない。自分たちペリシテを敗北に次ぐ敗北へと追いやった張本人がまさかまさかガドの町に立っているのだとしたら、大変なことです。その緊張と危険を感じたダビデは瞬間、狂気を装ったのです。気が変になっている男を演じたのです。門の扉をかきむしり、髭に涎を垂らし、狂人になるのです。すると王アキシユは「この男は気が狂っている。なぜこんな男をわたしのところに連れてきたのだ。こいつをわたしの家に入れようとでもいいのか。」そう言ったのです。王が狂人を避けたために、家来たちもこの男がだれであれ、外に出す以外はなく、町の外に追い出されました。ダビデは命拾いするのです。

ダビデのとっさの機転は見事と言えば見事でした。もちろんそれは格好のいいものでもないし、実際みっともないことに見えたでしょう。だがダビデはこの難局も全力で乗り切ったのではないか。少年ダビデの時のように、巨人ゴリアトを小さな石の一撃で倒すあの見事さは、ここには一つもない。だがダビデは「生きる」ためにたたかったのではないか。自分の人生はある意味サウルによってむちゃくちゃにされているとしても、神がわたしに託そうとされているなんらかの使命がある、ということを感じながら、「生きる」ことそのものに全力なのです。それがガドでの狂気の人ダビデなので

はないか。けれど、そうは見ないという人々もいたでしょう。ここにいるのは、王から追われ、何もかも失い、身を落とし、零落した一人の人間の気も狂わんばかりの姿そのものなのではないか、というのです。

確かに、何もかも失い、身を落としたことは事実。零落したことも事実。気が狂いそうになる現実であったことも事実。気が狂ってもおかしくない現実。自暴自棄になる人もいるでしょう。だがダビデはそうではなかった。「いきる」のです。それもただ漫然と生きるのではなく、「いのち」を神から受けて、さすらう身であっても、生きたのではないか。狂気の人を装うダビデの姿はひとがいきるうえで本当に大事なことは何か、をわたしたちに考えさせる姿です。

ダビデがサウル王から逃げ出し、さまよい続けた。それは特殊なことだと思えるかもしれない。しかし、ある人が言うように、人は生涯何かに追われるようにさまよっている。その何かとは、罪と死だ、というのです。

しかしどんなにさまよっても、さまよい続けていても帰るべき場所、そこでいのちを受ける場所を知っていたダビデは幸いです。わたしたちも幸いです。いのちを神から受けて、生きること、活かされて生きること、神から託されている使命を生きること、誠実でありたい。